

## 『全地球的な課題』

評議員 佐藤禎一

グローバル化という言葉をよく耳にしますが、現実の世界で進んでいるのは、主としてインターナショナル化であり、真のグローバル化と呼べるケースは少ないものです。そもそも現在の「国際的」なシステムが、国際連合の例に見られるように、主権国家を基礎単位としているものであって、国境を越える活動については、それぞれの主権国家のシステムの調整がまず必要になるところです。昨今の「ファースト」合戦などの世界の動きを眺めますと、世界連邦などという「グローバル」な仕掛けは当分できることではあるまいと感じさせられます。



しかしながら、一国で処理することのできない課題はますます増加しつつあり、そのような状況を克服し、世界中での取り組みが望まれるケースは続々と出てきているという事は紛れのない事実でしょう。

国連では、2015年のターゲットイヤーには殆どの目標が達成されなかったミレニアム・ディベロップメント・ゴール (MDGs) に代わってサステイナブル・ディベロップメント・ゴール (SDGs) が採択され、改めて2030年をターゲットにした17の具体的な目標と169に上る具体的な達成目標を明示されました。ここに至るまでには、環境問題を中心にした各分野での議論を受けて1987年に出されたブルントラント・レポート (Our Common Future) により国連の課題として持続可能性の考え方が登場したのを始めとして、環境問題を中心にした1992年のリオ宣言 (Agenda21)、2002年のリオ+10 (日本から Education for Sustainable Development=ESD の推進運動を提案し、2005年から2014年までが UN Decade for ESD とされました。) を経て、2012年のリオ+20 (The Future We Want) で包括的な持続可能性の活動強化が打ち出され、今回のSDGsにつながったものです。ちなみに、SDGのD=「Development」は、我が国ではODAの流れから「開発」と訳されていますが、私は、近時の状況 (物理的な基盤整備だけが目標ではなくなっていること、先進国・途上国を問わず共通の課題として追求されるようになっていくことなど) から「発展」と訳すべきと考えています。ユネスコ国内委員会からも、ESDを「持続発展教育」と表記することが提案されましたが、政府全体の方針で今まで通りの「持続開発教育」が公式な訳語となっています。近時ウィキペディアを見ると「持続発展教育と訳されることもある」とあり、嬉しく思っています。

関連して、地球環境問題に関しては、ローマクラブが「成長の限界」というレポートを1972年に世に問うて以来、地球という存在をどう捉えるか、という観点から多くの

議論が巻き起こり、地球システム科学という分野の論議は広がりや深みを増してきたように思われます。人は幾何級数的に増えるが、食料は算術級数的にしか増えない、というマルサスの「人口論」由来の論点を強調した点で大きなインパクトを世に与えたのです。その後、地球を精密な機械と捉える考え方など地球の限界を憂う観点からの提案など多様な観点から多くの議論を生みましたが、ラブロックが地球を生命体と考え、「ガイア」という概念を発表して以来、強いインパクトとともに、賛否いずれからも活発な意見が交わされ、今日では、多くの人に受け入れられるところとなりました。

これらの流れを受けて、今日、多くの観点からの地球環境問題への取り組みが行われていますが、「地球環境問題」の定義が曖昧に思えるほど、その分野は広がりつつあります。平成30年4月の閣議決定された第5次環境基本計画を見ますと、分野ごとの施策としては、低炭素社会の構築、生物多様性の保全及び持続可能な利用、循環型社会の形成、大気環境、水環境、土壌環境等の保全、化学物質の循環リスクの評価・管理、各施策の基盤、各主体の参加及び国際協力に係わる施策が挙げられており、これに呼応するかたちで、重点戦略を支える環境政策として、気候変動対策、循環型社会の形成、生物多様性の確保・自然共生、環境リスクの管理、基盤となる施策（環境影響評価、環境研究・技術開発、環境教育・環境学習、環境情報等）、東日本震災からの復興・創生及び今後の大規模災害発生時の対応を挙げています。この課題についてのおおよその内包を覗き知ることができますが、その外延はなおお発展中とも思われ、体系化の仕方にも各種の考え方があるようです。

これらの課題は、時間をかけて議論が進んできただけあって、国際的な協力、それも条約という国際規範まで高められた協力も少なくありません。外務省のホームページからひろってみても、オゾン層の保護に関するウィーン条約、生物多様性に関する生物多様性条約、野生動植物保護に関するワシントン条約、ラムサール条約、森林・砂漠化に関する砂漠化対処条約などがあり、これらの条約に定められた活動を担当する国際機関も充実されてきています。

他方で、世界的な課題でありながたはまだ揺籃期にある課題も多く、生命倫理や文化多様性などの課題は、環境問題ほどしっかりとMDGsに組み込まれているとは言えないようです。

そのような課題の一つとして近時大きな関心を呼んでいるのは、Artificial Intelligence（人工知能、いわゆるAI）があります。物理学、計算機科学などを基礎として発展を続けるこの課題は、物理学的・工学的な飛躍的な進歩とディープラーニング、ビッグデータなどの発展とも繋がりあい、その将来の在り方、特に人間の知性を超えるか、という課題を全世界に問うています。いわゆる強いAI・弱いAI論争ですが、果たしてシンギュラリティ（限界点）を超えるか、あるいは超えてもよいのか等の深刻な課題となっていると言えそうです。2018年のダボス会議にローマ法皇がメッセージを伝えたこともこの問題の重大性を物語っているようです。2016年にマイクロソフトのRay

が次々に放った不適切ツイート、ついには、大きくなったら神になりたいというセンセイショナルな発言は、皮肉に取れば、AIはまだ限界点を超えていない（悪い人が教え込んだ範囲の発言しかできてはいない）とも言えませんが、この課題を世界中で真剣に考えなければならないものにした、とも言えそうです。

元ユネスコ大使